

からこかぎ

第19号 平成29年 8月 2日(木) 発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

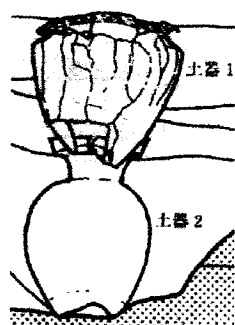
TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

遺物紹介～井戸

会報編集グループ

今回は、第2室に展示されている「井戸」を紹介します。展示物は、遺跡西地区の第19次調査で出土したものです。調査区(315㎡)からは、大溝2条が検出され、東側の大溝から、土坑が検出され、その土坑の中心部から下の図面(報告書図面一部修正)のように、下部が打ち抜かれている短頸壺(下)と甕(上)を垂直に二段に重ねた状態で出土しました。甕が畿内第IV様式期ですので中期後半の井戸と考えられます。なお、第19次調査区は、第8次・11次(中期標高46.80m)を中心とした西地区の集落中心部(微高地)の縁辺部(中期46.60m)に位置します。

(1) 土坑



土坑は、楕円形(長径2m、短径推定1.5m、深さ70cm)で、弥生時代以前の自然河道の上にあります。また、大溝は、隣接する第13次調査の中期溝に連なっています。上段の甕の口縁部が上端から17cmのところまで欠損し、欠けた口縁部が溝内に落ち込んでいることから、溝が開いている時期に井戸が設置されたものと考えられています。一方、同じ調査区から土坑が検出され、中層の土坑の崩壊部分3箇所には板材

を入れ込んだ状態の井戸枠状の簡易な施設が検出されました。展示井戸より新しい中期末～後期初頭の木組み井戸とされています。

なお、遺跡南東側と南西側での比高差を根拠に、運河をイメージした環濠内流水を想定する意見があります。遺跡の大溝(環濠)から井戸や木器貯蔵穴が多く検出されることから、溝の内部は地下水が浸み出すので、井戸や貯蔵穴の利用に適していたものと思われます。

(2) 井戸

井戸は、側面の崩壊を防ぐ井戸側(枠)を基準に、①素掘り井戸②木組み井戸③その他の井戸に分類されています。井戸は、前期にはあまりみられず、中期になると畿内を中心に素掘り井戸が多くみられ、後期になると木組み井戸が現れます。

展示井戸は、土器枠を利用したのですが、縄文期に見られた集水施設に類似しています。因みに、遺跡北西側の第17次調査からは、河道の砂層の露出面に底を打ち欠いた第I様式新段階(前期後半)の壺を埋めた縄文様式の集水施設が検出されています。

また、「遺跡パンフレット」に掲載されている土器枠を利用した井戸(中期中葉)は、南地区(69次調査)からの検出で、木製臼→大型甕→大型受口短頸壺と組み合わせられています。

なお、中期に井戸が増加する理由を環濠の形成(高燥化)と関連付ける意見がありますが、中期段階の増加傾向は、先述のとおり畿内全域に言え、集落活動の活発化に伴うものと考えます。

遺跡紹介—法貴寺北遺跡

弥生ウォーク世話人グループ

今回は、唐古・鍵遺跡から北東 400m に位置する法貴寺北遺跡(以下、「北遺跡」という)を紹介いたします。昭和57年に実施された第1次調査は、志貴高校建設に伴う事前調査で、弥生時代後期の方形周溝墓 2 基や土器棺墓が検出され、唐古・鍵遺跡の墓域と考えられていた遺跡です。

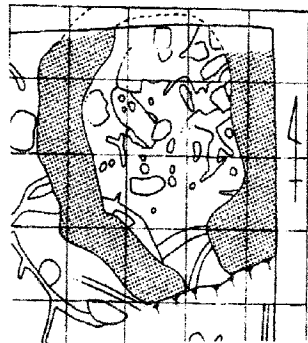
(1) 位置

北遺跡は、標高 48m 前後の沖積地に立地しています。遺跡西南側には、弥生～古墳時代の大規模自然流路(南東から北西方向の旧河川)があり遺跡の西限を示しています。また、遺跡東側には現代の初瀬川が北流しています。

北遺跡は、唐古・鍵遺跡と同様、旧河川が形成した自然堤防(微高地)上に位置していたと考えられ、その中心部は、今の初瀬川の川底から東側に広がると予想されています。

(2) 方形周溝墓

北遺跡が目ざされているのは、先ほど述べた第1次調査(体育館部分 1200 m²)で検出された西端部の墓域です。



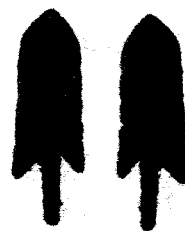
まず、調査地北東隅の右図の方形周溝墓(溝幅 3.5~4m、深さ 50cm、溝内側平坦部 1 辺約 10m)ですが、南辺に陸橋(突出部)があり、埋葬施設は検出されませんでした。周溝内から正立した高杯 2 点と甕 1 点、有孔板製品(未製品)が出土しています。発掘当時は弥生後期とされていましたが、現在の編年観では、後期後半から終末期に該当すると考えられます。一方、調査拡張区から検出されたやや小ぶりの方形周溝墓(溝幅 1m、深さ 50cm、溝内側平坦部 1 辺 7~8m)は、中央に埋葬施設(木棺直葬 2 基)を伴いません。ただ、陸橋は検出

されませんでした。

なお、方形周溝墓に近接して小型土器(器高 10cm 内外)が大量に出土する土坑があり、その北側に 2 間の柱根が残存する柱が残っていて、葬送儀礼の痕跡と思われます。

(3) 壺棺墓

調査区には、墓域であることを示す土器を埋納した土坑墓が多く検出されています。そのうち、3 基の壺棺墓のみが報告されています。特に注目されたのは、器高 60cm の二重口縁壺(口縁部に赤色顔料塗布)内に副葬されていた右図の鉄鏃です。奈良盆地では金属製品のみならず副葬品も少ない時期のものですが、底辺の両端のかえりが特徴的で、他地域との交流を示す出土品です。



(4) 唐古・鍵遺跡との関連

北遺跡に近接する唐古・鍵遺跡は、北東部のエリアですが、その付近は発掘があまり進んでいません。しかし、北遺跡に最も近い唐古・鍵遺跡東端の第54次調査では、中期～後期の谷地形(60cm の微低地)が発見され、後期後半には幅 10m 厚さ 1m 以上の洪水堆積層が検出されています。その堆積層からは、集落活動を示す梯子、柱材、土器などが出土しています。北遺跡を含め、唐古・鍵遺跡東側エリアの後期後半の活発な活動痕跡を示しています。

なお、第54次調査西側には、第27次調査の後期～終末期の最掘削環濠をはじめ北西に伸びる環濠が検出されています。その内側には生活痕跡を示す濃厚な遺物が出土する第23次、59次調査区があります。唐古・鍵遺跡北東部の環濠は、北遺跡で検出された河川から唐古池東側の集落を洪水から守る機能を持っていたと考えられます。また、唐古・鍵遺跡東側の地形や後期以降の集落動向を考えると、北遺跡は、唐古・鍵遺跡の墓域というよりは北遺跡東側に想定されている集落の墓域と考えられます。

1. 弥生ウォークに参加して

宮川 真由美

1 池田遺跡1号墓

6月10日 定刻10時に近鉄線築山駅を出発し、ほどなく大和高田市池田遺跡につきました。テーマは、会報で事前案内がありました弥生後期後半～終末期の弥生墳丘墓の確認でした。

まず、短いバチ状の陸橋をもつ池田11号墳(1号墓)を訪れました。昨年、現地説明会が開催され話題となった橿原市瀬田遺跡の陸橋をもつ円形周溝墓と対比しながら説明がありました。

特に、弥生墳丘墓の着眼点は、①墳丘形態(円形か方形か) ②墳丘規模(墳長) ③突出部の有無(陸橋) ④埋葬施設の形態(埋葬者の数) ⑤副葬品の有無(武器形鉄器・銅鏡など) ⑥地勢(丘陵地など)とのことでした。1号墓は、方形(12×12m)で、北側中央部がバチ状に広がる僅かな突出部を持ち、周溝から二重口縁壺片と小型倣製鏡が出土した墳丘墓でした。

2 黒石10号墓

次いで、広陵町黒石10号墓を訪れました。奈良県では数少ない弥生墳丘墓の代表遺跡ですが、うまく保存がなされてなく単なる道路のそばの草むらでがっかりしました。黒石10号墓は、低丘陵に位置し、墳形や墳丘の規模さらに突出部などが池田1号墓と違いがありませんでしたが、複数の埋葬施設(組み合わせ木棺2基)がある点に注目しました。

そこで、田原本町の弥生墳丘墓の説明がありました。法貴寺北遺跡の突出部付の方形周溝墓と十六面葉王寺遺跡の大型円形周溝墓(復元墳丘推定18m)と後期～終末期の墳丘墓群でした。今後の弥生ウォークで訪れたい遺跡です。

その後、古墳時代前期初頭の新山古墳(竪穴式石室から34面の鏡が出土)で休憩し、そこで畿内の弥生墳丘墓の説明がありました。摂津・河

内・和泉地方の弥生墳丘墓を、図面をもとに突出部を含め墳形や副葬品の変化などの説明でした。後期後半には既に大阪平野の周溝墓に変化が起きていたとのことでした。

3 久渡3号墳

昼食をはさんで、今回のメインとされる上牧町久渡3号墳に行きました。途中、上牧銅鐸出土地を訪ねました。出土地は久渡古墳



群から谷をはさんで100m程度の至近距離です。

久渡3号墳は、丘陵部北側の眺望の良い突出部をもつ1辺15m規模の方形墳丘墓で、3基の組合式木棺が検出されていましたが、驚いたのはその副葬品の説明でした。弥生時代の鍬と異なり殺傷力を高めた定格式鉄鍬4点と腸袂(わたくり)式鉄鍬1点や2個体以上の剣(または槍)といった鉄製武具類と画文帯環状乳神獣鏡(1面)が出土していました。奈良盆地の弥生墓制の特徴は、単葬で集落域に近接した所を墓域とし、副葬品も余り出土していないそうですので、それらと様相を異にした墳丘墓でした。

そこで、奈良盆地の終末期の墳丘墓の説明がありました。特に、盆地東部の宇陀市に集中していて河内・山城の台状墓の影響(淀川→木津川→名張川→宇陀川のルート)とする意見の紹介がありました。先日バス旅行で訪れた丹後半島との関連が思い起こされ興味のある話でしたが、二上山博物館のガイド依頼時間に遅れていたもので、簡単な説明でな思いがしました。

最後に、前回の弥生ウォークは、ホケノ山や石塚、矢塚、勝山(古墳)など前方後円形墳丘墓に行きましたが、今回は、その前段階の弥生墳丘墓の変化を確認できたウォークでした。

支援隊ホームページのご案内

藤原隆雄 万徳順一

今年6月より制作途中ですが、ホームページを公開しています。

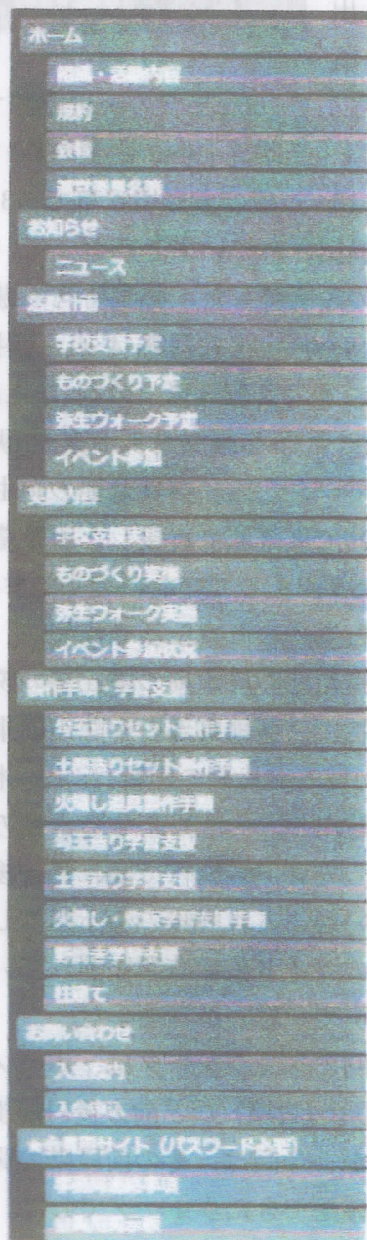
コンテンツは、これからの予定・実施イベントの内容などとなっています。また、掲示板もありますので、連絡などにご利用ください。日々追加作成しますので、ご覧ください。

1、検索方法

Google、yahoo等の検索サイトからホームページを閲覧ください。スマホでもご覧できます。

唐古鍵支援隊 | 検索 の入力し検索、もしくは <https://karakokagi-sien.jimdo.com/> を入力し検索

2、コンテンツメニュー



スマートフォンホームページ



関係サイト 直近のお知らせ
下線があるところをクリックすればそのページに飛びます

★メールアドレス新しくしました
 kksien_2004@excite.co.jp
 尚、連絡係と各セクション担当係
 複数で対応します。
 迷惑メール設定されている方はド
 メインの解除をお願いします
 (@excite.co.jp)

パスワードは別に連絡します

「唐古・鍵遺跡」(座学)のご案内

井上 知章

第20回弥生ウォークは、酷暑を避けて、青垣学習センター2階研修室で行います。今回は、「唐古・鍵遺跡」(以下、遺跡という。)をテーマに選びました。今回は、昭和12年1月から3月に行なわれた第1次調査を中心に遺跡の学史的意義を確認したいと思います。報告書は、「大和唐古彌生式遺跡の研究」として昭和18年に刊行されています。

1 地形など

(1) 地形

報告書では、調査地(唐古池下層)は、奈良盆地の最も低湿部分にあり、旧初瀬川が盆地中央部の湖沼帯に流入する付近に作り上げた三角州に立地し、遺跡の中心部としています。

これは、今日の地形観と異なっていて、現在は、旧初瀬川の堆積によって形成された自然堤防(微高地)に相当すると考えられています。

また、注目すべきは、遺物の層序を明らかにしていて、上層部に作られた堅穴状の凹所内を充填する黒色土層が遺物包含層と特定しています。これは、唐古・鍵遺跡のみならず近畿の弥生遺跡に通有するキー層となっています。

(2) 環境

調査から、森林に生息する鹿・猪などの哺乳動物類の遺骸が多く出土し、縄文貝塚と同様の構成である点を根拠に、当時の奈良盆地周辺の山々は今日よりも一層森林に覆われていたと評価しています。しかし、今日と違って、花粉分析などの調査は未だなく、専ら木器の木質鑑定を通じて植生分析がなされています。木製利器類の材質は、落葉照葉樹が多く、針葉樹は少ないと報告されています。報告された樹種をみると、多寡が不明ですが二次林が含まれています。また、種子果実類では、モモ・クルミが多く、トチノキ・クリなど多種類の食用果実が報告されています。そこには、湿地を好むヒシの実が

あり、ミゾソバの種子とあわせ、付近に低湿地の存在を推定しています。

このように、遺跡周囲には樹木が多く、建設材などに活用され、また果実が食用に利用されていたと推定しています。これは、その後の自然化学分析結果と相違ない報告です。

2 遺構

遺構は、下図のとおり、中・南・北の三つの砂層と大小百数十基の堅穴のみです。

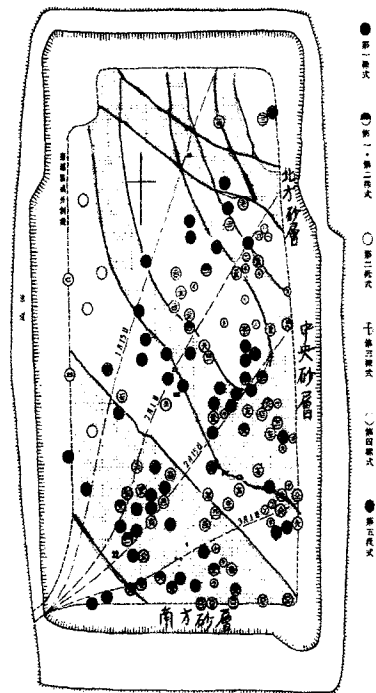
(1) 砂層(自然流路)

出土土器から、中央砂層(畿内第1様式を中心)、南方砂層(畿内第1様式を含み第II様式中心)、北方砂層(第III・IV様式中心)が検出されました。旧初瀬川と思われる流路は、唐古池と鍵池を結ぶ線を網の目状に走行していたとされています。

(2) 堅穴(土坑)

重視されるのは、堅穴です。発見例の多い堅穴は、第1様式期の隅丸の矩形(短辺1.6m以上)で、上部の屋蓋の構造とされる住居関連遺物が出土し、さらに内部には日常使用の器物が遺存し、火を使用した炉跡があることから堅穴

住居遺構としています。また、第V様式の堅穴は小型の壺形土器のみが出土し、貯蔵用の倉庫施設とし、この時期の住居は、絵画土器(梯子のある高床家屋)を根拠に高床式を想定しています。但し、堅穴の評価について、堅穴内の滞水を前提に木器の貯蔵穴とし、小規模の堅穴を井戸とする見解があります。



留意したいのは、堅穴を次に述べる土器編年と関連づけ集落動向を解明している点です。中央・南方砂層を中心としたⅠ様式(堅穴数27)、Ⅱ様式(8)、さらに北方砂層を中心としたⅢ様式(3)、Ⅳ様式(6)、Ⅴ様式(10)は、集落内の移動を示しているとしています。

3 遺物

(1) 弥生土器

遺跡からは、縄文土器を含め多様な土器が出土しています。報告書では、小林行雄先生の様式論をもとに弥生土器を五様式(唐古編年)に分類しています。土器を器形・装飾・製作の方面で分類し、同一堅穴から出土する土器間の変化を一様式と捉える前提で編年したものです。

その編年に基づいて遺構・遺物が整理され、相対的な年代の考証がなされています。また、土器の用途に応じた器形を区別し、土器の分化発達の過程を明らかにしています。

最近では、放射性炭素年代測定法や年輪年代測定法が重視されますが、唐古編年(畿内編年)は、現在でも重視される標準化された土器編年で、これにより弥生時代の「時間軸」が確定できました。第1次調査の重要な成果物といえます。

(3) 木製耕具

遺跡からは、第1様式期を中心に、木製耕具が多量に出土し、さらに多量の籾殻や焼米や脱穀具の堅杵などが出土し、弥生時代が水稻耕作に立脚する文化であることを明らかにしました。第一次調査の最大の成果といえます。

木製耕具としては、平鍬・諸手鍬・馬鍬・鋤(未成品を含む)などが出土しています。その形態の違いは、使用の目的の変化に対応したものと、それを日常生活で稲作農耕が重きを成していた証しと、さらに豊富な焼米・籾殻の出土がそれを裏付けるものとしています。

(4) 石器

調査では、豊富な石器類(447点)が出土して

います。サヌカイトを石材とした石鏃・石槍などの打製石器(59%)、石包丁(25%)、石斧類(8%)とに分類され、太型・小型蛤刃石斧・扁片刃石斧・柱状片刃石斧など半島系の磨製石器も含まれています。石包丁や磨製石斧に使用されているのは、閃緑岩や緑泥片岩です。また、石製・土性紡錘車も出土しています。

(5) 銅鉄の金属製利器

報告書では、銅細線を接合用に使用した高杯形木器(Ⅰ～Ⅱ様式土坑出土)と鉄錆の付着した鹿角製刀子把の出土を根拠に、弥生時代は金属器の使用を過小に評価してはならないと力説しています。金属器の発見は、弥生期から古墳期の移行のプロセスを、鉄器を使用した生産力の高まりや武力の強化に求める根拠とされたもので、鉄を背景とした弥生史観を築いた重要な出土品です。現在もその考えを踏襲する根強い意見がありますが、現在は、奈良盆地の鉄の保有は少ないとみる意見が大勢となっています。

(6) 特別史跡

以上のように、第1次調査は、その後の弥生文化の研究の礎を築いたもので、10年後の登呂遺跡の発掘に連なるものです。

現在、唐古・鍵遺跡は、国史跡に指定されています。国史跡は、歴史上、学術上の価値が高いものとして、現在1700件ほど指定されています。特別史跡(遺跡の国宝)は、そのうち特に重要なものとして62件が指定されています。登呂遺跡、吉野ヶ里遺跡、原の辻遺跡などが弥生時代の特別史跡です。第1次調査の学術的価値を考慮すると、遺跡は特別史跡に相応しいと考えます。特別遺跡指定化は、今後の課題と思います。

(編集委員)

東 治雄 井上知章 植田洋高 大森初美
谷口敬子 花坂志郎 福島道昭 藤原隆雄
万徳順一 宮川真由美